

小宮豊隆

『三四郎』の材料

『三四郎』

の材料

『三四郎』の材料となったもので、私の知っている限りの事を、思い出し思い出し、此所に書きとめて置きたいと思う。

『三四郎』の初めに、三四郎が九州から上京の途中、名古屋で、知らない女と一緒に、一つ宿屋に泊る所がある。あれは松根東洋城の友人で、当時高等学校の生徒だった男が、実際に遭遇した事件である。当時はそんな事があり得るのかと思っていたが、然し広い世間にはそれ

ほど珍らしい事でもないらしく、現にこの五月号の『アララギ』の『村里小筆』の中に、結城哀草果が丁度同じような事を書いている。もつとも、哀草果の書いた女は、よほどモダンで、いろいろ男を誘う手続を踏んでいる。三四郎の会った女は、善悪の彼岸に住んで、黙々として、原始人らしく動いている。是は、美禰子を通して、アンコンシアス・ヒポクリット「無意識な偽善者」としての女を書こうとしていた漱石が、この女の中にも同じような「無意識な偽善者」アンコンシアス・ヒポクリットを発見して、特に美禰子の対照とした為めに、この女をそういう風に書いたものかとも思われる。

宿屋の宿帳に、三四郎は「福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生」並に「同県同郡同村同姓花二十三年」と書いた。然るに福岡県京都郡には、真崎村というのではないと言つて、当時九州から漱石の所へ、注意の投書をよくこした読者があつた。然し漱石から言えば、そういう村の名前が、福岡県京都郡にあるかないかなどという事は、問題ではなかつたのである。——三四郎は熊本の高等学校を卒業して、東京の大学に這入つた。その三四郎の郷里として、其所にはたった一人、三四郎の母親が住んでいて、生活程度が低くて、辺鄙で、読者の脳裏に、

何か九州の片田舎らしい感じが出さえすれば、それが田川郡であつても築上郡であつても、乃至は真崎村であつても糸崎村であつても、漱石にとつて、どうでも可い事だつたのである。

ただ、当時私は、大学を卒業して、夏休みに郷里に帰り、其所から郷里の状況を、幾度も漱石の所に報告した。私の郷里は、福岡県京都郡犀川村である。漱石は、私が漱石に宛てて書いた手紙を、多く、三四郎の母が三四郎に宛てて、郷里の状況を報告する手紙として用いた。同時に三四郎が、その手紙を見て、故郷の事を思い浮かべ

る、思い出の内容として用いた。それだから漱石のリズムの精神は、是が、田川郡でも築上郡でもなく、京都郡である必要があると感じ、その京都郡だけは保存する事にしたのであらうとも思う。——第二章の、三四郎の所へ初めて来た母の手紙の中には、鮎を送ってやりたいが、東京へ送ると途中で腐るから、送らないと、書いてある。第四章の母の手紙には、新蔵が蜂蜜をくれたから、それに焼酎を混ぜて、每晚盃に一杯ずつ飲んでいると、書いてある。それに関連して三四郎は、新蔵と自分の家との関係や、新蔵が蜜蜂を飼いだしたいきさつや、その

新蔵が自分の帰省する度に蜂蜜を持って来て上げる上げると言いながら、ついぞ今まで持って来たためしがなかった事などを思い出す。その母の手紙には、なお、平太郎が親爺の石塔を建てたから見に来て呉れると頼みに来て、貴方のところの若旦那は大学校へ這入っている位だから、石の善悪は屹度分る筈だから、序に聞いてみて呉れと言った、とも書いてある。第七章の母の手紙には、興津の高さんは、学問が出来るにも拘わらず、検定が通らないので、未だに月給が上がらずにいる、是は高さんが度胸がないので、試験を受けに行くたびに、身体が顫

えて、答案がかけないせいである、この前の時には友達の医学士に頼んで、顫えの留まる丸薬を拵えて貰って、試験前に飲んで出たが、やっぱり顫えて駄目だったのだそうだ、と書いてある。第九章の母の手紙は、野々宮さんに宛てたもので、それには、三十円の金があると、四人の家族が半年食って行かれると、書いてある。それに關聯して三四郎が、自分の家で、村の者が宮籠みやごもりをする際に、村全体に金を十円寄附すると、六十戸から一人ずつ出て来て、その六十人が、仕事を休んで、村の御宮へ集って、その十円で、朝から晩まで、酒を飲み続けに飲

み、御馳走を食いつづけに食うという話を、野々宮さんとよし子とにして聞かせる。——これらのものは凡て、明治四十一年の七月から八月までのうちに、私が私の郷里から漱石に宛てて書いた手紙を、ほとんどそのまま、種に使ったものである。ただそれを使うに際して、漱石が如何に巧妙にモンタージユを試みているかは、これだけの事実を知った上で、それがどういう場合に使われ、且つそれが全体とどう関係させられているかを、『三四郎』に就いてあたって見る人には、容易く会得される事ではないかと思う。

ただ、三四郎の母から野々宮さんの所へ「赤い魚の粕漬」が届く所が、第三章にあるが、是は野上白川が漱石の所へ屢々贈っていたもので、大分県白杵か何所かの名産、ひめいちの粕漬である。私の記憶にして誤がないならば、是は「粕共焼かすごとやいて、いざ皿へ転うつすと云う時に、粕を取らないと味が抜ける」と言つて、漱石に教えたのは、野上弥生であつた筈である。

「三尺位の花崗岩の台の上に、福新漬の罐程な複雑な器械が乗せて」あつて、その「罐の横っ腹に開いている二つの穴」が「蟒蛇の眼玉の様に光っている」という、

光線の圧力を試験する機械と、その試験の方法とを、漱石に見せたり説明したりした者は、無論寺田寅彦である。「青い空の静まり返った、上皮に、……刷毛先で掻き払った痕の様に、筋違に長く浮いている」白い薄雲が、みんな雪の粉で、下から見ると、ちっとも動いていないように見えるが、「あれで地上に起る台風以上の速力で動いているんですよ。」と教えるのも、亦寺田寅彦である。——こういう所へ来ると、寺田寅彦は野々宮さんになつて居り、夏目漱石は三四郎になつている。然るに第九章の精養軒の会合で、野々宮さんが光線の圧力をどう

して試験するかの、精しい手続を話すと、今度は夏目漱石は広田先生になり、野々宮さんになり、「筋向うの博士」になり、「縞の羽織の批評家」になって、物理学者と自然派・浪漫派の文学者との比較、特に物理学者とイブセンとの比較を試みるのである。そういう際には、三四郎は与次郎とともに、テーブルの片隅に小さくなって坐っている。

第三章で、三四郎が初めて大学の講義を聴いた時の印象が、簡単に描かれる。その中に或教授が演説口調で、「砲声一発浦賀の夢を破って」と講義を始める所が書いてあ

る。是は井上巽軒の講義で、たしか鈴木三重吉が直接か間接かに聴いて来て、漱石の所で報告したものである。我々の間では、一時、「砲声一発」という言葉が、井上巽軒の代名詞のようなものになっていた。

同じ第三章に、大学の講義に失望した三四郎が、図書館に這入って見る所が書いてある。どんな本を借り出して見ても、きつと誰かが読んでいたので、三四郎はびっくりする。そのうち三四郎の借り出した本の見返しに、鉛筆で乱暴に、何か一杯に書いてあるのが眼に著いた。「ヘーゲルの伯林大学に哲学を講じたる時、ヘーゲルに毫も

哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説くの講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。……」というのが、それである。然るに漱石は、明治四十年三月二十三日野上豊一郎に宛てて、「小生は頃日ヘーゲルが伯林大学で開講せし当時の情況を読んで大に感心致し候。彼の眼中は真理あるのみにて聴講者も亦真理を目的にして参り候。月給をあてにしたり権門からよめを貰う様な考で聴講せるものはなき様子に候。」と書いている。この見返しの楽書は、誰か知らない学生の楽書ではない。漱石によって創造された、漱石

自身の楽書である。

第四章で、広田先生は与次郎を連れて貸家捜しをする。途中で三四郎に出会い、三四郎の注意で、三人が「大きな石の門の立っている」家を見に行く。この石の門の立っている家を会見し、それを見に漱石を連れ出したのは、森田草平なのだそうである。そう言えば、明治四十年九月二十三日、漱石が森田草平に宛てた手紙には、今日千駄ヶ谷を探索して、君のいう石の門の家を見ようとしたが、千駄ヶ谷も随分広い所だから、何所にあるのか到頭分からなかった、それでもその「石門館」をもう一遍見

たいから、明日其所へ案内してくれないかと、書いてある。

広田先生が越して行った、西片町十番地へノ三号の家というのは、漱石が、明治三十九年十二月二十七日に千駄木から越して行き、明治四十年九月二十九日早稲田へ移った、西片町十番地ろノ七号の家が、モデルにとられていたようである。勿論この時、多くの弟子たちが手伝いに集ったが、美禰子のような女性のお弟子は、一人も集まらなかった。美禰子は漱石の、純然たる創造なのだから、集まりたくても集まれない訳である。

もつとも漱石は、美禰子を書く時に、一人の女性を、頭の中に持っていた。それは、森田草平の『煤烟』事件の相手方、即ち『煤烟』の女主人公朋子である。『三四郎』が書かれる時に、『煤烟』が発表されていなかった事は言うまでもない。然し『煤烟』の事件は、『三四郎』が書き出される四五ヶ月前に一段落を告げて居り、明治四十一年三月末から四月十日までの間、草平は漱石の所に厄介になつていたのでから、漱石は恐らく草平自身の口からも、又その事に関して斡旋していた生田長江の口からも、相当相手方の話を、精しく聴いていたものに違

いない。『日記及断片』の中の「明治四十年、四十一年頃」の部の「○Newspaper / back ティ whisper」で始まっている一群のスケッチは、多分その聞き書だろうと想像される。漱石は、そういう話をきいて、まだその人に会った事はないに拘わらず、自分の頭の中に、その人の「姿」を、具体的に纏め上げてしまうのである。そうしてその「姿」を頼りに、『三四郎』の美禰子を書いて行くのである。——朋子というのはああいう女ではないかと思しながら、僕は美禰子を書いて行つたと、漱石は後に私に話して聴かせた。

第七章では、美禰子の肖像画をかくという原口さんが、一中節の稽古をしていると言つて、いろいろその話をする。是は、松根東洋城から出た種である。当時東洋城は一中節の稽古に凝つて、漱石の所に来ては、頻にその話をしていた。此所の原口さんの台詞は、恐らく、東洋城の言つた事が、そっくりそのまま使われているのだと思う。勿論原口さんの画室に這入った時の感じは、正に橋口五葉の画室に這入った時の感じと、そっくりそのままの感じである。東洋城とは何の関係もない。

その原口さんの画室で、原口さんが三四郎に、「僕の

知った男にね、細君が厭になつて離縁を請求したものがあつた。……」と言つて話して聴かせる話は、事實は漱石自身の話である。明治四十一年七月以降、『三四郎』執筆以前と推定される、漱石の『日記及断片』の中に、漱石は「○己ハ婿ニ行くから入夫をしろ」という言葉だけを、記録している。

第十二章で与次郎が、あんな女の為に風邪なんか引いて熱を出したつて始まらない、日本じゃ今女の方が余つてゐるんだから、などと言つて、三四郎を慰めようとすつた。その序に与次郎が、自分にも色々あるが、うるさい

から、御用で長崎に出張すると言つて、女を放り出したという話をする。与次郎は医科の学生だという触れ込みで、その女に会っていたが、ある時その女から病氣だから診察してくれと頼まれて閉口した。然しその時はともかく、舌を見て、胸を叩いて、好い加減に胡魔化した。それが、長崎へ出張するから当分来ないというと、女は林檎を持ってステーションまで送りに行くと言ひ出したので、尠なからず弱つたというのである。是もたしか鈴木三重吉の、直接か間接かの経験で、三重吉自身漱石に話して聴せた所のものである。それを漱石は『三四郎』

で、思い余って病氣になった三四郎の枕元で、与次郎に話させて、三四郎の心持に寛ろぎをつける方便とした。

——その外、もつと考えて見たら、まだまだ幾つでも、種は出て来そうな気がする。特に松根東洋城、鈴木三重吉、森田草平、野上白川など、当時特に繁々と漱石の門に出入していた、外の弟子たちに聴いて見たら、もつと色んな事が出て来るに違いない。然し今私がざっと思ひ出し得る所は、是だけである。(一一・五・二七)

日本文学電子図書館

『三四郎』の材料

著 者：小宮豊隆

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

日本文学電子図書館